

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方
～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

I. 研究テーマにかかわって

われわれ人類は、実に様々な環境問題を抱えるようになったが、これらを解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態と原因を知ることが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人ひとりが、問題解決のために何をしなくてはならないのかを考え、実行していくことが必要とされている。

小学校における環境教育では、子どもが身近な環境に関心をもち、意欲的にかかわり、問題を見だし、考え判断し、よりよい環境作りや環境の保全に配慮した望ましい行動がとれる態度を育てることを目指す。生じている問題への「気づき」「知識」「問題解決への実行力」を育て、最終的には自分たちのライフスタイルを見直す力量をもつことが期待されている。

環境教育や環境学習の機会を充実させ、環境に対する豊かな感受性と熱意、見識を育み、「身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成」をめざし、本テーマを設定した。

II. 研究の具体的内容

1 学習会

1年 生活科「しろいききはきながら」～わたしとさんぼ ふゆ～

早川博江教諭（八代小）から、昨年度行われた研究授業の際に準備された教材（地域にある植物を中心としたもの）を、授業にどうやって生かしていったのか、収集するときのポイントや注意点はどんなものか、などを聞いた。

2 研究授業

資料を持ち寄っての理論研究を行い、授業者を中心に授業案を検討した。学校周辺の教材について、実際に見て回ったり、手にとって確かめたりした。

(1) 3年 総合的な学習の時間「鼓川探検隊」

牧丘第三小学校 授業者 石原喜久夫 教諭

身近な鼓川を取り巻く自然に親しむことを通して、人々の生活と環境とのかかわりについて知ろうとする単元。夏の自然物を使った仲間捜しゲームに取り組み、身近な自然の様子や季節の変化に気づくという授業を実践した。

(2) 2年 生活科「見つけた！しぜんのふしぎ」

牧丘第二小学校 授業者 山本ふみ子 教諭

学校探検と町探検で見つけた自然についての発表会。1年時から積み重ねてきた自然観察などで見つけた疑問に、子どもたち自身が調べたり実際に飼育

したりして、その結果を発表した。クイズを出題するなどの工夫もあった。

3 一人一実践

4 臨地研修 牧丘第三小学校～大弛峠とその周辺の自然観察

III. 成果と課題

1 学習会

早川教諭から、厳冬期にも動植物は生きている、という点を大事に扱ったものであることが語られ、教室で行うネイチャーゲームにも、実物に触れることは大事にしたい点であるということが確認された。校区内での自然体験を通して自然を身近なものに感じること、教師が意図的に仕組むことによって子どもの目が向くこと、身近な自然の様子や季節の変化に気づくようにしていくことも大切だと話し合われた。教材としては、植物は扱いやすいが動物や昆虫などは少々難しいところがあるということ、学校などの身近でよく見られるが気をつけてみないと気づかないものを選ぶこと、写真を活用するとよいなどの意見も交換された。

2 研究授業

牧丘第三小学校の自然豊富な環境においても、児童の自然離れの傾向は出始めているとのことであったが、仲間捜しの理由付けもしながら、出された10問すべてをクリアしていた。特に「つながり」についての発言を子どもなりにしながら推論していく様子には、きっと将来につながる資質だろう、という意見があった。

牧丘第二小学校に授業では、人前で活動に慣れていない児童6名が、一生懸命にチョウやガ、野鳥、植物などの発表をした。自然に対しての知識や関心の高さにはとても驚かされた。よい環境でもあるが、教師が主体的に自然にかかわろうとする姿勢こそが大切である、児童会でも環境にかかわる活動を積極的に取り入れていることで「自然好き」な子どもの育成に影響する、という意見もあった。

3 一人一実践

少ない部員数ながらも、内容の濃い実践を全員が報告することができた。総合、理科、生活、図工など、様々な教科での取り組みが紹介され、どの実践も大変参考になり、すぐにも授業に活用できるものばかりだった。当初はネイチャーゲームが主なテーマであったが、自然体験や調べ学習、委員会活動での取り組み例も発表もあった。これからの日々の実践に生かしていくヒントをたくさん共有できた。

4 臨地研修

牧丘第三小学校敷地内にて、授業に使う予定の各教材を観察した。体育館裏の用水路にヤマメを飼っていたり、そこからオニヤンマのヤゴが羽化していたり、オオムラサキが水を飲みに来ていたり、ハウノキの実が熟しているところを見たりすることができた。その後、山梨市と長野県南佐久郡川上村の境にある、標高2,360mの車両通行可能日本一の大弛峠まで移動し、北奥千丈岳まで歩いた。豊かな自然が同じ市内にあることを部員全員が実感した。教師の知識や関心がそのまま子どものもとなりやすい環境教育には、もっと教師自身の研修の機会を増やすことが必要だ、という意見も出された。